
心を解く占い師

3カード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心を解く占い師

【Nコード】

N1675Z

【作者名】

3カード

【あらすじ】

生まれた時から、人の嘘や表に出さない感情など小さな心の動きが分かった佐能優。

誰よりも人の汚さや

本当の意味での孤独をしっている彼女が選んだ道は
占い師

自己紹介

占い師の仕事は、彼女佐能優にとってはとてつもなく天職なのだろう。

佐能優として生まれた時から、まるでこうなることが決められていたのかもしれないように、

彼女は物心ついた時から、人の心がよめたのだ。

故に彼女はそこらへんにいる適当な占い師じゃなくて、複雑な彼女の能力をもって、仕事をしている。

その能力に対する苦勞はいつでも彼女を苦しめたのだけど、今日彼女は占い師として生きている。

占い師は占わない

いらっしやいませ」と若い女は声を光らせる。

彼女は今日も小さな店で客を占っている。

「今日はどんなお悩みでいらっしやったのですか？」と優しく問いかける時の彼女のまだ幼い微笑みからは、誰も、人並み外れた能力など想像をしない。

「人間関係で少し悩みがあつて……」と27か8の男性客が一言言おうものなら、

「恋愛関係についてですね？」と彼女は、それが当たり前であるかのように話を進めようとする。

客はとたんに驚き、息を飲み込む。

「なんでわかつたのですか？」と誰もが聞き返すが、

彼女はいつも「私を信用してなかつたんですね？」と真面目に返す。

それは嘘を見破れる彼女であるが故の毎回のショックなのかもしれない。

占い師は占わない2

「まあいいですけど、恋人さんと上手くいってないんですか？」
と彼女は微笑みながら話を続ける。

「いえ、まだ付き合っていないんです。良い感じになってきてると思うんですけど、なかなか発展がなくて、どうしたらいいものかと」
男は明らかに疲れていた。それは彼女じゃなくてもわかるくらいに。

「私は恋愛も人間関係と変わらないと思いますよ」

「え？」とつさの彼女の言葉に男は反応しきれなかった。

「今の世代を生きる人は何事にも戦略的になりすぎるんです。ましてやこれから先ずっと一緒に生きていこうとしてる人を見つかるためにも戦略的になってる。私はもっと素直でいいんじゃないかなと思います。そうしないと疲れちゃいますから」

男はゆっくりと話される彼女の言葉を黙って聞いていた。それはまるで自分を見つめ直すかのように

話が終わってからもずっと。

占い師は占わない3

彼女には分かっていた。この人は人間関係を偽って生きてきた人だということをし、
いや

彼女からしたらほとんど全ての人が人間関係の構築を何かしらの戦略ゲームのように繰り返し返しているように見えていたのかもしれない。

「あの？大丈夫ですか？」と男の顔を覗き込む。
男は怖い夢から覚めたように顔を上げて言った。

「少し昔の事を思い出していました。たしかに言われたとおりでした。また1からやり直してみます。ありがとうございます」と男は立ち上がった。

「あ……お金はいいんです。私の占い？が得になったときに払いに来てください」

彼女は頭を下げて男を見送った。

占い師は占わない4

客は帰った。彼女は人仕事終わったと言っかのようにある作家の小説を読み出す。

その時ばかりは平穏で誰にも邪魔されない静かな時。

彼女はそのうち眠っていた。

彼女は実のところ何も占っていなかった。

未来のことを予想する能力など、彼女にはないのだ。

ただ彼女ができることといえばそう、人の気持ちを天才的に理解することができるだけ。

ただそれだけなのだ。

毎日のように彼女は人を導いている。全てがうまくいくわけではないが、そう毎日のように。

常連少女は友達

ある日の彼女の店に暗い顔の少女が訪れた。

高校2年生、女、名前は遠藤未希^{えんどう みき}彼女の店の常連である。

「あら？いらっしやい。未希ちゃん今日はどうしたの？」

彼女は少女の元にて優しく語りかけた。

「友達と喧嘩しちゃって……」小さい声でそう言うと彼女はうつむいて涙をこぼし始めた。

大丈夫だよと彼女は小さい声でそう言い少女を抱きしめた。

大丈夫、大丈夫となんかもささやきながら、何分もの間

彼女は少女を抱きしめ続けた。

まるで母親のように……

常連少女は友達2

「大丈夫よ。仲直り出来るから、未希ちゃんはもう孤独なんて知らなくていい」

少女の頭を撫でながら、彼女は、言葉をかけ続けた。

まるでその空間だけは時間がゆっくりと動いているような感じで、二人はただそこにいた。

次第に泣き続けていた。少女も平常状態に戻っていた。

「ありがとうございます」小さな声でそういう少女に彼女は二の句を継がないで微笑む。

「顔洗ってきたほうがいいよ。もうお昼だけとお腹すかない？」

「うん。少しだけ」

「そう。分かった。じゃあお昼ご飯作るから一緒に食べよう」

彼女は多くを語らないし、言ってしまうえば、何もアドバイスなんてしない。ただ一緒にいるだけ。

孤独のツラさを知ってしまった少女にはそれが一番安心できるのかもしれない。

常連少女は友達3

「美味しい？未希ちゃん」

「うん美味しい」

彼女は手馴れた様子で奥の部屋のキッチンであっという間にオムライスを作り上げた。

占いをする部屋で女性二人がオムライスを食べる光景は大変異端だった。

彼女は手相もタロットも占いに使わないし、占い自体をしないのだが、一応雰囲気合わせるために一式はこの部屋に用意していた。

「優さん」「ん？」そう呼びかける少女の声には少し今までと違った雰囲気があった。

「私また友達と仲直りできるように頑張ります」彼女は優しいその言葉を返し、

「それでこそ私の友達ね。」と少女の頭を撫でた。

少女の成功を祈りながら。

悪夢

かなりの頻度で私は夢を見る。

それも決まって人が嘘をついている夢。

自分をかばう嘘ならまだいい。

でもそれも決まって人同士が嘘をつきあって、
蹴落としあっている。

その中で私は一人だけ傍観者。

身震いするような競争社会。

誰もが自分勝手な幸せのために平気で、嘘についてはそれを繰り返す。

親も友達も先生も小さい頃から、触れ合ってきた人たちはみんな、
小さな何かにとらわれていた。

私にはその小さな何かが、とても汚く見えて、この夢の中で繰り返
される利己主義から

逃げたくて、今日の私があるのかもしれない。

でも私は大まかに見て人間が嫌い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1675z/>

心を解く占い師

2011年12月8日00時50分発行